

海 (かいし) 市 No.9

● 詩

02 前田 勉 渦

● エッセイ

04 片津 森 のぼるさんと出会った路

06 佐藤ただし 水田とツバメ (7)

13 横山 仁 雑 記 (9)

渦

前田 勉

ウーファーから発信された
低音域の重い音が

耳殻の産毛を柔らかく撫でて
後方へ流れていった

気だるい午後の部屋に
庭先から吹き込まれた
少しばかりの風が
音と交じりあいながら
渦を巻いている

フレンチホルンの音に誘発されて
欠損したままの記憶が
不意に
ツイーターから送出され
後頭部で逡巡しはじめた

音にも

風にもなれず

病む人のイタミに

ただ頷くことしかできない非力さが
大きな渦になってゆく

のぼるさんと出会った路

片津 森

久しぶりの山登り、今日は金山滝口から前岳の女人堂跡へ向かった。

三、四十分もすると下りてくる人がいた。見覚えのある顔と思つたが、やはりのぼるさんだった。十年ほど前、私が転勤した先に既に彼は在籍していて、歓迎会の折に名を知つた。名前がそうだからと冗談半分で尋ねたら、山は好きでよく登っているのだそうだ。課は同じでも仕事の内容や現場も違うので、たまに喫煙室で顔を合わせる程度だったが、そんな時に山の話をお互いになつた。

いつだったか、彼が山形・古寺口から大朝日岳に行つてきたと、いろいろ話して聞かせるので、にわか刺激されてこちらも早速登りに行つたということが

あつた。三年後に私が転勤して他所へ出てからは会う機会はなくなつたが、山中で遭遇したことが一、二度あつた。そのとき岩手の南本内岳に行つたという話だつた。案内書でおおよその位置を知るだけだつた私には、随分山奥で一人なら心細そうな路を想像した。そんな山によく行くなあ。一人でか、と聞いたような覚えがあるが、どうだつたか。今日は、この前、群馬の親戚宅を拠点にして武尊山や、新潟との県境にある谷川岳に行つてきたという。結構、登っているなあ。それから、最近、白内障の手術をしたのだといつた。そうかあ、オレも、多少の光でも眩しく感じるようになってきてなあ、白内障の気があるんでないかと思つてきたよ、年だなあ。そんなふうな二、三の話の後、彼は下つていった。

再び登り始めてから間もなく、何やら木の枝に白い紙が下がっている。目を近づけると荷札に鉛筆書きの句が書かれていた。「この山の秋の声聞き半世紀井戸の蛙」。五十年も登つてきた人のようだ。井戸の蛙は俳号だろう。荷札を句の短冊に見立てて、細い針金で枝に結わえてあつた。裏返すと「足元の花は黄花草

「秋桐です」と記されていた。たしかに足元には黄色い花が咲いていた。莖に、一センチほどの花がちょうど親指と人差指を開いたような形で並んでついていた。さっきののぼるさんではないだろう。私と同年輩の彼が五十年も山登りをしてきたとは考えにくいから。もつと高齢で、風流な山登りをする人の姿を思い、ポツと灯が点つたようだった。

女人堂跡には誰もいなかった。鳥居の傍のベンチで、バーナーで作ったラーメンを啜った。下山路では誰とも会わず、淡々と下った。クマ除けの鈴がいやに大きく鳴るので、ザックの腰ベルトと腰の間に押し込めて鳴らないようにした。気がつく、夏には羽虫が顔や首筋にうるさく付きまといていたものだが、今日はそれがなくて助かった。さすがに九月も半ばになって、山から暑気が去ると虫たちも姿を消したようだった。今朝降りそうだった雨にも当たらなかつた。金山滝の辺りまで来て、丸太橋を渡ってから沢の水に腕を晒していると、どこからか声がした。辺りを見回すと、上半身裸の若い男性が二人、沢の中の岩に腰をかけて談笑しているのだった。裸の付き合いか。向こうがこつ

ちを見たので手を振って合図をすると、向こうも返してよこした。

滝を見下ろせる路には、石というより泥が固まったようなごつごつした塊が土の中から顔を出していて、それはもう角が取れてナメっている。だから特に下山の時は神経を使う。油断すると滑ってコケてしまいうだ。そこを慎重にこなし、金属製の階段を降って登山口にある橋を渡る。県道近くの駐車場に至るまでの路には秋の野草が花を咲かせていた。ヤマトリカブト、ミズヒキ。それは分かるが、ほかにも名の知らない小さな花が路傍を飾っていた。今日の出会いの有終の美……。ありがとさん。

山日記（平成二五年九月）から

水田とツバメ（七）

佐藤 ただし

・大雨

七月二二、二三日の大雨は秋田県に大きな被害をもたらした。私が住む雄物川下流域の秋田市豊岩もこの大雨により床上浸水や土砂崩れ、田畑の冠水による農業被害があった。私が見たり聞いたりしただけでも床上浸水が六棟、土砂崩れは二七箇所、冠水して被害のあった畑も多かった。また、バスが通る幹線道路の一部が水に浸かり、二三日から二四日の朝まで通行止めとなった。

二三日の朝から降り始めた雨は断続的に夜中も降り続けたが、翌二三日には小ぶりになっていた。朝になつて雄物川の水位が気になり、雨具を着て堤防まで歩いた。家から堤防までは距離にすれば五〇〇メートル

ル位だ。道路の両側に民家が立ち並ぶ通りを右に折れ、排水路にかかっている小さな橋に近づくと排水路の水は粘土色に濁り、勢いよく排水水門に向かって流れていた。水位も普段より二メートル近く上がっていた。

民家を過ぎて畑に出た。堤防に通じる道や周辺の畑はまだ大丈夫だったが、今年大豆を作付した圃場は水に浸かっていた。この圃場から逃げ出したミミズが雨に濡れたアスファルト道路の一部を薄い紅色に染めていた。圃場が水に浸かり苦しくなつて這い出てきたのか、水を吸つて二〇センチ位の長さになつていた。その数は数え切れないほどだ。

堤防の斜面をよじ登ると、川幅を広げ濁流と化した川が勢いよく河口へと流れていた。堤防から川の淵までは一〇〇メートルもあるだろうか。河川敷の中に作られた畑や野球場はまだ水に浸かっていた。なかった。

雨は午前中には止んでいたが上流部に降つた影響で、雄物川河口の水位は徐々に上昇していたため、午後になつて排水路の水門が閉められた。そのためこの地域の排水路の水位が上昇し、田畑や家屋への浸水も始ま

り、朝の時点で道路が冠水していた付近の民家は床上まで水に浸かっていた。

近くの消防署の職員が消防車でやって来て、冠水した道路の確認や床上浸水している家の住民の避難状況を確認していた。地元の消防団も道路の冠水箇所を通行止めにしたリ、浸水しそうな家の前に土嚢を積んだりして対応した。

家の近くまで水位が上がって来た人々は心配になって道路に集まり、お互いに情報を交換しながら、不安な表情で成り行きを見守った。

午後になって天気は好転した。車で、冠水していない農道を走り、今朝歩いてきた堤防のところで車を止めた。雄物川の川幅は堤防の法面にまで広がっていた。濁った水が生き物のように河口へ向かって流れていた。朝には見えていた河川敷の畑や野球場も濁った水の中に消え、かろうじてバックネットが半分くらい顔を出していた。

子供の頃、大雨で排水路の水が溢れ、今朝歩いてきた橋を渡れなかったことがあった。その時も堤防にきて、この近くから川を見たことがあったことを覚えて

いる。

水路が溢れて橋を渡れなかったもので、どうやってここまで歩いて来たのか覚えていないが、ここよりも少し上流の堤防だったと思う。その時は川の水位はもっと上がって、堤防の法面の上の方まで来ていたと思っていた。川幅も普段の二倍以上に広がり、その迫力に恐怖心を覚えたが、子供の頃の記憶なので確証はない。

数日してネットでその頃の被害に関する資料を見たら、一九六九年（昭和四四年）に被害があったと書かれていた。多分、私が覚えていたのは、この年の大雨だったのだと思う。

堤防を挟んだ河川の反対側は水門を閉めたせいとか、静かな光景だった。今朝がた歩いてきた堤防までの道はすっかり水没し、辺り一面が水に浸かっていた。大豆やイネの一部も水没していた。

夕方近くになって雄物川河口の水位が下がってきたので豊岩の居使にある水門を開いたと知った。それに伴い周辺地域の水位も徐々に下がり始めた。翌日には冠水した道路も水が引き、車が通れるようになった。

この二日間の雨によりイネや畑作物の被害が気になるところだ。冠水した時期にもよるが、イネは三日間くらい水に浸かっけていても大丈夫だと聞いている。イネは非常に生命力の強い植物だ。多くの国の主食になるだけのことはある。

・若者

秋田市雄和にあるHファームの野菜団地で、同じく秋田市のNファームが栽培している枝豆を収穫する機会があった。NファームはHファームからこの畑を借り、枝豆を栽培している。

枝豆に力を入れているJA新あきたは今年新たに枝豆収穫機を二台導入した。この枝豆収穫機は中型トラクターに取り付けるタイプで、畑に植わっている枝豆の茎から莢のついた豆だけを収穫してゆく機械である。直径八〇センチ幅六〇センチほどのドラムの表面に、ある程度自由に可働する、長さ一〇センチ、太さ四ミリほどの金属の棒が百本程ついていて、ドラムが回転して枝豆をはじき、そのはじいた枝豆をブロワーの風力で後方に運び、回転するローラーの隙間から落下し

て、コンテナに入る仕組みだ。枝豆を栽培している農家や営農組織はJAからこの機械を借りて収穫するわけだが、収穫を間近に控えていた為、二台のうち一台をうちの法人のトラクターに取り付けた。

八月五日から収穫作業を行い、一〇日までにいったん収穫を終えた。そのまま収穫機はトラクターに取り付けてあったため、トラクターごとHファームに運び、使い慣れているということでおペレーターを頼んできたようだ。

八月一日、朝五時から作業を開始すると聞いている。作業機はJAで現地に運んでくれていた。生まれ育った豊岩以外の農地で作業するのは初めてではないが、午前一時頃には目が覚めてしまい、その後一時間毎に目が覚めて眠れず、三時には起きて身支度をした。

作業機の準備もあるので、四時前には家を出た。軽トラックのライトを点け、夜明け前の暗い道を雄和の圃場に向かって走った。黒い雲の間から明け始めた白い空が見え、雄大な水田風景が見えてきた。Hファームに近づくと、ダリアを栽培しているビニールハウス

に煌々と灯がともり、光り輝いていた。

今日作業する場所はビニールハウスのすぐ下で、圃場の端にトラクターを置いてあった。

トラクターのエンジンをかけ、作業機の準備を終えたところ、軽トラックが一台近づいてきて止まり、中から恰幅の良い若者が小走りで走って来た。挨拶をしてその若者から話を聞くと、その若者は秋田市東部のNファームの社員で、今年はこのHファームの圃場を借りて枝豆を栽培しているという。構成員は五名で、そのうちの一名はダリアの栽培にかかり切っているため、枝豆は四人で取り組んでいるという。枝豆やダリアのほか、米作りもしているため、思ったように作業がはかどらない面もあるというが、中々意欲のある組織だと思った。こうした若者が次代を担ってゆくのだろう。圃場の枝豆の姿は立派で見事に実や葉をつけていた。枝豆の生育が良いと言うと今年の結果におごることなく精進してゆきたいという返事が帰って来た。この日は約一〇aの枝豆を収穫する予定で、一五〇メートルほどの枝豆の畝を四本収穫した。

こうした圃場で、農業に取り組んでいる若者に会う

ことは少なく、枝豆やダリアといった、コメ以外の作物の栽培に真摯に取り組む姿に感銘を受けた。

・お盆のツバメ

八月一三日、今日は仕事をしない日と決めている。墓参りなどをしてご先祖様を思いやるのだ。とはいえ何もしないわけにもゆかない。畑に行つてナスやトマトなど食べごろの野菜は収穫しなければならぬ。仕事はしないつもりだがやることはいっぱいある。

八時近くになつて朝食を終え、二階の窓から外を見ると、電線にツバメが四羽止まっている。皆同じ方向を向いて時間を持て余しているのか、時々、羽根を伸ばしたり、羽繕いをしている。双眼鏡を取り出し、そのツバメを覗いてみると、胸の脇や、頭の縁にうぶ毛が残っているのが見え、今年生まれた幼鳥であることがわかる。そのツバメをじっと見ている。電線に止まつて、何を見、何を考えているのか。

こうして長い時間、一羽の鳥や一つの対象を見ていることはほとんどない。性格的なものなのか、何かに急かされているように日々を過ごしていることが多い。

小林秀雄が物を見るには最低でも一分以上その対象を見なければならぬと「無私精神」に書いていたように記憶している。

子供も巣立ち、会社を退職して家にいるということ、内館牧子さんの本の題名にあるように、ある意味「終わった人」でもある。何も忙しくする必要もない。明日も明後日もある。電線に止まっているツバメのように、飛び立つ日が来るまでは羽根を広げたり、羽繕いをしたりしてゆつくりと好きなことをしていればいいのだと考えたりもする。これもお盆のなせる業か。

・理想とするイネ

八月二三日、お昼前から強い雨が降った。気になる雨だ。お盆を過ぎてイネの穂が出そろい、稲穂に実が入り始めるこの頃に、強い雨や風雨になると、葉の色が濃く草丈の長いイネは倒伏することがある。

春先からイネづくりに取り組んで来た結果がまず出始める時期だ。今年は春先に肥料を散布する際に、散布量の調整を間違えてしまった田んぼが一枚あった。その一枚は肥料が均一に散布されず、七月下旬からイ

ネの生育にムラが出来てしまっていた。

翌日田んぼを見回ると、案の定、草丈の伸びたところのイネが少しなびいていた。この後、収穫までに台風など来なければいいが稲刈りまでにはまだひと月以上ある。

私が考える理想とするイネの姿はそのイネが持つ可能性を最大限発揮しているようなイネだ。一本当たりの穂数も多く、刈り取りまで倒れない強靱さとしなやかさを持ったイネだ。コンバインで刈り取りしていた時、手応えを感じさせるようなイネでもある。しかもそのイネは私が作るのではなく、私が準備した田んぼの中で、水とお日様によって出来るものだと思っている。そのため、田植え後に私がするのは、畦畔の草刈りと水管理が主な仕事で、いかにイネが育ちやすくするかという点を気にかけている。

このようなイネづくりを続けているが、思ったように茎は太くならないし、倒伏することもしょっちゅうである。

また、ここ二年ほどは少ないが、それまでは、出穂後にヒヨロヒヨロとヒエが伸びて来て、田んぼ一面に

ヒエがはえ、稲刈りまで毎日のように田に入り、ヒエを取っていた。

イネの倒伏にしろ、ヒエの生えた田んぼにしろ、見た目にはみっともない光景だ。ヒエは取ってしまったえば何とかなるが、倒伏した田んぼは始末が悪い。来年はこんなことにならないような施策をするが、今年はとりあえず刈り取りまで天気が続くことを祈るしかない。

・老人

八月二五日、JAのSさんからの依頼で、今度は川向いの四ツ小屋にある枝豆畑に行くことになった。

午前九時にSさんと待ち合わせ、トラクターを乗せた中型トラクターの後を軽トラクターに乗ってついでいった。

枝豆畑に着いてトラクターを降ろして畑に入ってみると、昨日からの雨で畑の中は柔らかく、長靴がぬかるほどなっていた。四ツ小屋の田畑は水はけがいいと聞いていたので、作業ができるかなと思ってやってきたが、さすがに昨日の大雨では作業は出来ないと判断し、明日実施することになった。

八月二六日八時半頃四ツ小屋の畑に着くと、先に軽トラクターが一台止まっていて、七〇代中盤位の方がひとり畑に立って、枝豆畑を見ていた。

車を降りて近づいて挨拶すると、この圃場の持ち主の方であった。畑に降りて長靴で硬さを確認すると土が硬くなっていて作業可能となっていた。九時の作業開始まで少し時間があつたので話をすると、この方は勤めを定年退職後に農業を始めようと考え、四ツ小屋の田んぼを二ha程買い求めたという。枝豆は今年一ha作付し、種類も五種類作付したそう。

今年作付した枝豆の一種は秋田県のオリジナル品種である、「秋田ほのか」よりもおいしい枝豆で、知人から種を分けてもらったという。今秋田市で、この枝豆を作っているのは、種を分けてくれたその人と二人だけだと楽しそうに話してくれた。

この日の天気予報は晴れで雨の降る確立二〇％となっていたため、雲の流れを確認していなかったが、急に雨雲が空に広がり始めたため、予定より早く作業にかかることにした。今日は一〇〇メートルほどの畝を四本収穫する予定だったが一本目の途中で、スコ

ルのような雨が降り出した。枝豆畑はみるみるうちに雨がたまり始めたため、一本収穫して一時中断した。この雨で畑がまた昨日のような状態に逆戻りしたため、作業を中止しようとJ AのSさんに電話で話したが、どうしても今日収穫しなければならぬという。今日は大曲の花火大会で、J Rの駅でこの枝豆を来客にプレゼントし、秋田の枝豆をアピールするのだという。予報では雨はもうすぐ上がるからやってほしいという。一時間ほどして雨も上がり、作業を再開し一時間前には作業を終えた。

作業を終えて、手伝いに来ていた二名の方も帰ったあと、定年退職してから田んぼや農業機械を買い求め、農業していることについて話をしてくれた。家人からは将来、あなたが働けなくなったらどうするのと心配されているそうだが、その時は誰かほかの人が現れるものだよと答えていると聞いていた。あまり心配せず、やりたいことをやってあの世へ行こうと聞いているよかったです。

雑記 (9)

横山 仁

*

前号 16 ページで、「32 ページ足らず」とかいたが、「40 ページ足らず」と訂正されたい。
訂正ついでに、思考する言葉を、また引用しておく。

「詩が詩であるためには、書く者にとつての言葉がなければならぬ。それは多分、決め手だ。他者のために書くのなら、他者の言葉でいいか。だとすれば、この場合の、箇であることを捨ててまで他者のために主張する、その根拠は何か。私の場合は、私自身を問う形の動機で支えられていたから、読む書くが同時的となり、問う形の言葉ばかりを促すこととなった。一つの箇存在を拒絶する言葉をも持たずに、他の存在を拒絶する言葉を持つはずがない。

書く場合、他者のために動けらるとするのは偽善以外にない。」(砂室圭『言葉・もしくは詩集と云われる辞書』1983年)

前号、佐藤さんの「水田とツバメ (6)」に、「ハバキ抜き」ということがあった。もしかして、脱字の打ち間違いかとおもって、同人たちにメールをしたところ、前田さんから、「当方は「抜き、で慣れたな」と返事があった。ネットで調べてみると、「幹事さんのひとりごと」(秋田市 土崎港 竜騎町一区 豊友会 非公式ブログ 語ったもん勝ち)でも、「地元じゃ『はばきぬき』と言う。」とあった。(わたしじしんは、この言葉を使ったことがなく、数年前にはじめてしまった) ついでに、数人にきいてみたところ、秋田市の人は、「ぬぎ」、仙北の人では、「ぬぎ」だったが、大館の人は、つかったことがないということであった。県教委編の『秋田のことば』(無明舎出版)によれば、全県でつかわれていて、「はん(注、んは、ちいさい、ん。

以下同じ) ぼぎぬき(注、ぎの濁点のところに⁹がある。

鼻濁音の意)(脛巾脱ぎ)、旅から帰ってきたときに行う祝宴」とあった。また知人は、出発前は「わらじ締め」といふと教えてくれた。これも『秋田のことば』では、「はんばぎはぎ」(脛巾履き)、他に「わらんじしめ」(大森町・湯沢市)で、旅立つ時の激励会、とあった。

確認してみると、「はんばぎ(はんばぎ)」とは、「脚絆」で、旅をする時になどに脛に巻き付けるものを言う、とある。

『日本民俗大辞典』(吉川弘文館)の「きやはん(脚絆)」では、「保護と防寒を兼ねて脛に巻く衣服。脚半とも書く。主として山仕事や雪中の歩行に用いられた。布製と藁、蒲の茎、藤の皮などの植物で編んだものがあり、両者を総称して脛巾(はんばぎ)と呼ぶところもあるが、多くは前者を脚絆、後者を脛巾と呼ぶ。」とある。また、「ハバキ」では見出しがないが、「いずもしんこう(出雲信仰)」の項に「石川県の白山麓では十月十五日に菜の神ヌクナヒコナノ神が出雲にハバキ(藁製の履物)をつけていくのでハバキツケと称して、大根雑炊を家の神棚に供えて送る。十一月十五日には、

ハバキヌギと称して同じように迎える。」とあった。

『大辞典』(平凡社)では、「ハバキヌギ 方言。①帰宅祝。旅から帰って来た祝宴。②他郷から来て最初に投宿した家。」、「ハバキノギ 方言。他国から帰って来た祝宴。」。ちなみに「ハバキザケ 出立に臨んで飲む酒。名古屋市」というのもあった。

「脛巾」や「わらじ」など、履き物というくくりでとらえていたのかもしいないが、しかし、なんののかんと、飲んでいったわけだな。

*

方言といえは、新潮社の「Webでも考える人」の池田雅延氏の連載「随想 小林秀雄」で「グジ」がでてきた。ハゼでは、ない。

(引用開始)

「先生は、入ってすぐの一隅に腰を下るし、「酒、それとグジをくれ」と、しよっちゅう来られているかのような口ぶりで注文された。グジとは福井の若狭湾で

獲れる甘鯛で、主に京都での呼び名である。私も先生に做った。やがて、爛をつけた酒が来た。先生は、酌をしたりされたりは嫌いだった。」

(引用終わり)

筆者の池田氏は、新潮社で「71年、小林秀雄氏の書籍編集係となり、83年の氏の死去までその訾咳に接する」とあった。小林秀雄と言えば、「批評とは竟に己れの夢を懐疑的に語ることではないのか」が思い出されるが、池田氏はいっている。

(引用開始)

「評論」は、他人を捉えて他人を語る、だが、己れを語ることはない。対して「批評」は、他人を捉えて他人を語り、他人を語ることによって己れを語る。そうやって己れを知る。小林秀雄は、他人という鏡に自分を写し、自分自身の深奥を透視しようとして「批評」を書いたのである。

(引用終わり)

だいぶまえ？ に、「一億総評論家」といわれたことがあった。その意味では、小林の区別は、いまでも当てはまる。

連載では、どうぜん本居宣長についても語られていて、読まずにいる新潮文庫の『本居宣長』(上、下)に興味がいいた。いづれ……？

また小林は、桜好きで、「六十歳を過ぎてからだが、ぼぼ毎年、花見に出かけた」が、「しかし、先生は、ソメイヨシノは品がないと言っていた。」そして、昭和四十一年には角館の枝垂桜を見にきているが、このときのことでも、どこかに書いていないかしらん。ご存じの方はご教示を。

*

NHKで、日曜の早朝に「こころの時代」という番組を放送している。時刻が早い、などがあって、ほとんどみていないが、このインタビュ어가活字化されていることがわかった。

たとえば、石巻生まれの辺見庸「瓦礫の中から言葉

を」。

(引用開始)

私も四半世紀以上、メデイアの世界にいたからよく知っています。「オリンピック」「戦争」というものは、メデイアにいる人間は、個が個たり得なくなる。誰も異を称えなくなる。まるで一緒に聞っているような顔付きをする。三月十一日を境に、少なくとも数日間一週間か十日、テレビからコマーシャルが消えた。政府広告のようなもの、「人に優しくしよう」みたいなキャッチフレーズが、気が狂わんばかりに、何度も何度も何度も流されていく。今度は優しさを押し売りしてくる。あれは裏返して言えば、三・一一以前は、みんなどこにかく人を出し抜いても「金儲けしようじゃないか」と言ってきたじゃないか、というふうに、僕は思う。そのことに、あなた方の表現世界は奉仕して来たじゃないか、と、僕は言いたい。「投資に乗り遅れるな」「ハイリステク、ハイリターンだ」と言ってきたじゃないか。そのための映像をあなた方は作ったじゃないか。そのための言葉を、詩人たちも無警戒に

作ってきたではないか。誰がそれに異を称えたか、というふうに僕は言いたい。人は買いいじめに走る。それを今頃になって、「見にくい」という。でも既にその姿があった。三・一一の遙か以前からあった。そのような世界に我々はずっと本当は生きてきた。だから言っているわけです。そこには持つべき予感というものを、むしろ排除するものがあった。破壊に至った時に、それを予感しなかった責任は誰か、問われなければいけない。それは私であり、文を綴るものたち、自称であれ、他称であれ、あるいは大家であれ、名もないう者であれ、詩人たち、作家たちは、全員がその責めを負わなければいけない、というふうに、私は思っているんです。

(引用終わり)

自戒を込めて、長すぎる引用をしておく。ちなみに、この発言をもとにして、書き下ろされたのが『瓦礫の中から言葉を わたしの〈死者〉へ』(NHK出版新書)である。

*

『ソリストの思考術 第四巻 玄侑宗久の生きる力』（六曜社、2012年）でおしえられたのは、鴨長明「方丈記」だった。「方丈記」が、ルポルタージュだったとはしらなかった。ただし、「東日本大震災復興構想会議委員」などをやっている（いた）せいいか、原発に関する意見には、本音を言わないのかどうか、原発安全神話を繰り返して、違和感を持ったことを記憶している。

ところが最近、「いちろうちゃんのブログ」というところで、「坊主が屏風に上手に坊主のソツついた（僧侶・玄侑宗久氏の投稿について）」をみつけた。2014年6月7日（土）付の東京新聞記事への批判である。

（引用開始）

（私のこの記事を読んだ感想）

僧侶・玄侑宗久氏は、福島県民200万人に、ひとり

ひとりお会いして、この3年間、鼻血が出たか否か、どのような出たか、などなどを聞き尽くしたのでしょうか。また、鼻血はともかく、政府や自治体などの事故後対応の不十分・不適切のために放射能汚染と被ばくに関する懸念が高まっていること、そしてまた、その心配や不安を口に出して言えない社会状況に福島県がある中で、僧侶として、どこまで被害者の方々の心に届く宗教的な試みをなされたのでしょうか（なされたのなら、それを東京新聞にお書きになればよかったです）。

あるいはまた、玄侑宗久氏は、（御用）医者・医学者のまねごとのようなことを言い、鼻血とはかくあらねばならぬ、のようなことを説教しています。僧侶というから医師免許を取られたのでしょうか。僧侶というのは、畑違いの医学的評価を一方的に押し付けるのではなく、放射線被曝や放射能に苦しむ人々の心に寄り添い、少しでも安らぎを提供するのがその使命ではないのですか。つまらぬ医学処方方の説教をするよりも、福島の方々の安寧をただひたすら祈り抜くことが、僧侶

として、宗教者としてのやるべきことではないのですか。

(引用終わり)

東京新聞の記事がよめないので参考までに、としか言い様がないが、このブログでは、E T V特集「原発災害の地にて〜対談 玄侑宗久・吉岡忍」での玄侑宗久氏については、「理性的で知的で、信頼のおける対話」だったといっている。少なくともここでは、御用僧侶ではなかったのだろう。

*

「人生は冥土までの暇潰し」という「亀さん」のブログがあり、「松坂慶子を女優にした『事件』」などというような記事もある。

(引用開始)

ここで、松坂慶子と言えば山田監督を思い出す。彼女は同監督の「男はつらいよ」に2本（「浪花の恋の寅

次郎」および「寅次郎の縁談」の他、「キネマの天地」に出演している。この山田監督は筋金入りの反戦派監督であり、その山田監督の映画に出演している俳優の中に反戦派が多い。例えば、「男はつらいよ」の「柴又慕情」、「寅次郎恋やつれ」の他、「母べえ」、「母と暮せば」などに主演した吉永小百合、「男はつらいよ」の「寅次郎頑張り」、「学校III」に主演した大竹しのぶなどだ。その他にも、山田監督同様に筋金入りの反戦派の俳優がいた。あの故三國連太郎である。三國は同監督の「息子」に主演しているが、血は争えぬもので、その三國の息子・佐藤浩市も、己れの意見を持つ俳優のようだ。

(引用終わり)

吉永小百合に興味はなかったが、同ブログに吉永小百合の連載「私の十本」が転載されていたので、何回目かのをよんでみると、インタビュアーがうまく感想を引き出しているのかどうか、なかなかおもしろかった。以後、読むようにしている。

ちなみに、「男はつらいよ」は、「水戸黄門」なのだ

ろうが、小生とは呼吸が合わないで見る気がしない。

(引用開始)

「私の十本」という吉永小百合の自伝が、東京新聞で始まった。吉永は良家のお嬢さんとして育ち、何不自由ない生活を送っていたものどばかり思っていたが、今朝の記事を読むに、米びつが空っぽになったという生活も体験していることを初めて知った。拙稿「松坂慶子を女優にした「事件」 その2」にも書いたことだが、貧乏な子ども時代を過ごしていたのは、何も松坂慶子や大竹しのぶだけではなかったようだ。

(引用終わり)

その「私の十本 吉永小百合」(1) 芸能界デビューから。

(引用開始)

「(ラジオの出演料は) かなりだったはず。米びつが空っぽというようなわが家の状態はなくなり、おかげが少し増えたのは、育ち盛りの私にはたまらなく

嬉(うれ)しいことでした」

それは違う。「私が幼いころ、父が事業に失敗して、

本当に一粒の米もない日がありました。小学生のころ、家に借金取りが押し寄せ、差し押さえるのを見たときは『私、新聞配達をする』って言って、親に止められたこともあります」

(引用終わり)

かつて老母の家(商家)でも、税務署がタンスなどに差し押さえる赤札を貼っていったとのことだが、この連載では、吉永の目を通した、一流と言われる監督や俳優などの人間像、芸術観がみえてくる。

*

前号で北朝鮮のことにふれたところ、「朝鮮動乱の折、虐殺されたという多数の知識人達などはポルポトが遣ったことと同じではなかったのか、などなど」という感想をもらった。ブログにみえる韓半島いがい、

とくべつ興味があるわけではなく、歴史もしらないので調べてみた。

以下、近代の「大量虐殺を行った歴史上の支配者【ラジキンズ】」からの引用。Wikipediaなどの出典名は、省略した。

(引用開始)

■第8位 李承晩 (韓国) 少なくとも120万人
韓国初代大統領、第1～3代目大統領

"日本と韓国では知名度の低い、「保導連盟事件」などで虐殺。

1950年の朝鮮戦争勃発で、李承晩大統領の命令によって、
軍や警察、共産主義からの脱却を目指す人間、
政治犯や民間人など、少なくとも120万人あまりを
大量虐殺した。

朝鮮戦争の初期に、韓国政府によって子供を含む少なくとも10万人以上の人々を殺害。
そして、排水溝や炭鉱や海に遺棄。

韓国では近年まで事件に触れることもタブー視されている。 "

■第7位 金日成 (北朝鮮) 160万人

"1950年、朝鮮戦争が始まった。北朝鮮軍は侵襲した地域で民衆に対し虐殺・肅清などを行った。

1980年代以降はそれまで頼みの綱だったソ連などからの援助が大きく減り、大量の餓死者が出た。 "
(引用終わり)

ちなみに、第6位がボル・ボト (カンボジア) で、170万人、第5位がエンゼエル・パシヤ (トルコ) 250万人、第4位がシオポルド2世 (ベルギー) 1500万人。第3位がアドルフ・ヒトラー (ドイツ) 1700万人。第2位がヨシフ・スターリン (ソ連) 2300万人で、第1位が、ダントツで、毛沢東 (中国) 7800万人となっている。

これだけみるとサヨクに分が悪いが、右にしろ左にしろ、「正義」という幻想）を振りかざす気狂いほど、手がつけられないということだろう。毛沢東の場合、文化大革命を起こしたのは、権力欲からという。

*

また、「何から何まで〈大日本帝国〉の焼直し・磨直しの金王朝では」という感想ももらったが、この件に関しては、次のような文章（このブログだったかどうかは不明だが）を少し前に見ていて、興味深くおもっていた。つまり、北朝鮮をつくったのは、大日本帝国だった……。

「真実の共有」という寺田佳正さんのフェイスブックから。

（引用開始）

2014年6月5日・

中丸薫さんが陸軍特務機関の畑中理（おさむ）につい

て書いてくださっていますので、少し抜粋します。

陸軍中野学校出身の畑中理という日本人が終戦後、日本はアメリカに占領され、言いなりの属国になってしまふと考え、「朝鮮半島にもう一つの日本を作ろう」と残ったのです。

そして金日成の右腕として大活躍したのです。

彼は現地名を金策（キムチュク）と名乗って、朝鮮半島に大日本帝国陸軍の思想を残そうと努めました。旧陸軍の教育プログラムを用いて、現地の人々を教育し、植民地であった半島を独立国として作り上げようと考えたようです。

朝鮮戦争後は、北朝鮮の軍隊に入って、陸軍中野学校のメンツドをはじめ旧陸軍の教育システムを伝えました。現在も金策軍官学校と言う学校名にその名を残しています。

ただ一つ申し上げますが、北朝鮮の金玉朝の方々はアメリカによってワル骨頂のように報道されてきました。が、パナマのノリエガの場合はアメリカの空軍の麻薬密輸入をやめさせようと動いた彼を、アメリカは麻薬王として拘引し、カタフイの場合はご存知のように国民のために石油利益で超福祉国家を作り上げたのですが、石油決済をユーロにしようど発表したので、殺されましたが、同じように、北朝鮮の金玉朝はとも真面目な人が多く、アメリカは真反対の発表ばかりしており、日本のメディアも嘘ばかり報道してきました。

人口2000万人の頃、餓死が盛んに言われ、何十万人亡くなったなどの報道が溢れていましたが、今現実には2400万人以上いまして、人口は増えつつあります。

日本はメディアアとアメリカに完全に騙されているのです。

(引用終わり)

これが事実かどうか不明だが、紹介しておく。

また、別のブログ（「都市伝説まとめ大辞典」）では、「実は、金正日の父親が金策（キム・チャク）との事。（中略）つまり、今の北朝鮮の指導者は、日本人の血が流れ、金策（キム・チャク）こと畑中理の意志が受け継がれているのです。」ともあった。

*

かつて某同人誌で盗作騒ぎが起きたことがある。本人は盗作を否定し、作品は盗作したと疑われるものよりも以前に書いたものだととして、その掲載誌のコピーを山形一至氏らにみせた。ところが、そのコピーした掲載誌は、ねつ造したものであったのである。つまり、古い雑誌に、新しく印字したものを張り、それをコピーして、いかにもその古い雑誌にその作品が載ったようにみせかけたものだった。

その作品が載った詩集から、その作品を削除した詩集をすぐに作り直したところをみると、やましいところがあったのだろう。

雑誌のコピーを持って弁明に来た時、信用してし

まった山形氏はごちそうしたとので、後日、ねつ造がわかったとき大変怒り、この顛末を詳しく小冊子にまとめている。

このように、真面目で、正義感の強かった山形一至氏に關係する事件なので、ばからしいと思つたが、やり方があまりにもおかしいという声もいろいろ聞かえているし、超高齢者が多い協会だから、今後またこのようなことがあるとやばいから、考えておくべき…との声もあり、様々な意見を引き出すために、たたき台として愚見をのべる。

山形氏の葬儀の花代として、4000円を請求されたのが始まりである。詩人協会有志で花をあげるということをきいていた人もいたようだが（金額は未定）、小生は聞いていず（きいていれば断っていた）、4000円の根拠を集金人のY氏にたずねたところ、漢詩人クラブ・密造者・詩人協会有志合計の花代を、葬儀の参列者で割つたとのこと（だれのアイデアか知らないが、異なる団体を合計するということじたい、非常識だらうし、さらには、關係した参列者全員の数把握してはいなかったとも…。）単純に割ると、1人の負

担額が5000円と大きくなるので（頼みもしないものの代金を請求されたら、だれだってひっくり返るだらうな）、複数の団体に入っている人は4000円、単独では3000円ということだった（後日、小生の負担は、4000円から3000円に減額された）。つまり、たとえば葬儀に出席しない密造者の磐城氏や若狭氏などは数に入らず、密造者一同からは、はずされたということになる（看板に偽りあり、で、一同ではなく、密造者有志だな）。そして、結果的には、複数の団体加盟者らが、自らの負担を少なくするために、参列しなかつた詩人協会会員、特に幹事（特別好きでやっているわけでもないだろうに）から不足分を徴収している。支払いを要求されたZ氏は、詩人協会有志の花代が足りなくなつたと理解し送つたが、3団体の合計の不足を補うものとはかんがえもしなかつた。また花も、必要ないほど、贅沢な代物だったことは、及びもつかなかつたことだろう。（これまでの葬儀で、このような形で会員が負担を強いられたことはなかつたような気がするが…）。

日本海詩人に関して、あゆかわ氏が手配したとの

ことで、これらとは関わりない。

はずもないだろうから、この件に関しての収支明細書が送られてくるのを待ちたい。

小生は、詩人協会と漢詩人クラブの花代として、3000円を支払うことになるが、いずれ、不正をする

献金した協会会員には、忌明けの時にでも、山形家からお返し品の物が送られるのでは？

あとがき

◆元同僚の皆さんから記念にと腕時計を戴いた。厚くて重たい自動巻きアナログ。分誤差もあるし3日も放置すると止まってしまう。それまで薄くて軽いソーラーの電波腕時計を使っていたので全くの逆。これはアナログ的にゆっくりせよとの皆さんからのメッセージであろうと受け止めてみたら、すっかりアナログ化した自分がある。(B)

◆先日出かけた信州・松本市内の投宿先のこと。1泊素泊まり3,450円で、1室に3組の二段ベッドがあり、その上段を選んだ。若者が主な利用客で中には欧米系や中近東系と思われる顔があった。宿全体にアロマの香りが漂っていた。覚悟はしていたが、いびきのソロやデュオを聞いているうちに朝を迎えた。ネットでは、宿にドミトリールームという形容がついていたが、日本語訳では寮とか寄宿舎のこと。いろんなタイプの宿があるものだと、感心するばかりだった。(K)

◆8月もあとわずか。東北の太平洋側は1ヶ月以上も晴れ間のない日が続いているという。地球の温暖化が言われ、やませや冷害という言葉も忘れていたが、今夏の豪雨による自然災害を見ると、自然の破壊力の大きさに驚かされる。

豪雨の翌日、早速畑に立って後片付けをしている農家の方を見たが、諦めずに立ち上がるこうした姿に明日があると思いたい。(T)

◆結局、ゴミは1粒だけだった。鳥さんの食料になったと思われるが、中途半端に様子を見たところもあるので来年に期待したい。また、ことしは、「バケツ稲づくり」をやっているが、こうしたものは、手入れをしなければだめなんだなということが、わかった。(J)

「海市」第9号
2017年9月9日発行

発行 書肆えん
秋田市新屋松美町5-6 横山方